特集

宮城県図書館のボランティア活動

これからの図書館をつくる“協働”のカタチ――。

宮城県図書館のボランティア制度がスタートしたのは平成10年3月のこと。仙台市宮城野区榴ヶ岡から現在の泉区紫山への移転に合わせてのことで、今年で10年目を迎えます。今回の特集では、図書館ボランティアの活動のようすを紹介し、さらに文化を担う、文化ボランティアとしての可能性を探ります。

音訳ボランティアの研修会

＊図書館と利用者をつないだ10年

宮城県図書館にボランティア制度が創設された当時、阪神大震災でのボランティアの活躍が注目を集め、社会の関心が高まっていましたが、通常の、公共サービスに参加する例は、まだ、決して多くはありませんでした。また、文化を担う、文化ボランティアとしても、さきがけとなる試みであったのです。

スタート時に、宮城県図書館にボランティアとしてご登録いただいた方は、「音訳」「書架整理」「展示室案内」などの分野で合わせて45名でしたが、その後、活動分野も登録者数も次第に増え、平成18年度は「音訳」「書架整理」に加えて「視聴覚整理」「図書館案内（展示室案内から変更）」「読み聞かせ」――と、合計5つの分野で119人が活動しています。

ボランティア制度の導入は、県内の加美町中新田図書館、石巻市図書館、多賀城市立図書館、白石市図書館など、多くの公共図書館でも進んでおり、ボランティア同士の交流、情報交換も行われるようになっています。

これからの図書館づくりに、ボランティアの方々、お一人ひとりの思いが結実し、図書館員とボランティアの方々がよい形で協働することで、利用者の皆さまに、より質の高いサービスが提供できると考えています。

＊図書館ボランティアの研修制度

図書館ボランティアとして活動するには、図書館としてのサービスや資料（本や雑誌、新聞、ビデオ・DVDなど）に関わる必要な知識、技術を身に付ける必要があります。たとえば日本十進分類法、著作権法、図書館サービスやコミュニケーションに関わる知識などです。

新たにボランティアに登録すると、最初に、一般講座を受講し、基本的な知識を習得します。そのあとで、「書架整理ボランティア」「音訳ボランティア」など5つの分野に分かれて専門講座を受講し、各分野に必要な知識を学びます。「図書館案内ボランティア」は、企画展、特別展が開催されるごとに、その内容について研修会を開催し、来場者への説明、解説に備えます。「音訳ボランティア」は、プロのアナウンサー等を講師に技術講習会を開催し、スキルアップを図ります。

＊思いを実践するボランティア活動

書架整理、図書館案内、音訳などの分野に、ボランティアの方々が参加するようになり、図書館員との協働のもと、利用者自身の視点を取り入れた図書館サービスが実現できるようになりました。さらに一般の方にボランティアとして、図書館サービスに参加していただくことで、広く社会に、図書館への理解が深まると期待できます。

ボランティアの方々も、社会に奉仕する満足感と充実感が得られたり、新たな知識や技能、人脈を得たりすることもできます。ボランティアの方々の立場は様々ですが、図書館でのボランティア活動は生涯学習の実践の場ともなります。

＊広がる交流と活動

東北大学との合同企画展

昨年の11月、創立125周年を迎えた本館と、来年度100周年を迎える東北大学の附属図書館との共催で、合同企画展「江戸の遊び～けっこう楽しいエコレジャー～」がせんだいメディアテークで開催されました。この企画展に、宮城県図書館から図書館案内ボランティアの方が参加し、受付、案内係などを担当しました。

また、加美町中新田図書館で、昨年、新たに音訳ボランティア活動が開始されましたが、そのときには、本館の音訳ボランティアが講師となりました。このように、宮城県図書館から外に出ての活動も始まっていますし、図書館ボランティア同士の交流も増えています。

図書館ボランティアは地域の文化を担う、文化ボランティアのフロントランナーとして期待を高めています。

（宮城県図書館 企画協力班　嵯峨 進）

図書館づくりのパートナー

白石市図書館　館長　**平間啓子**さん

白石市図書館のボランティア制度は平成17年6月にスタートしました。どこの公共図書館でも経営には厳しさが増していると思いますが、本館も例外ではなく、少ないスタッフ、予算のなかで、いかに利用者と地域に貢献できるかが、課題となっています。ボランティア制度は、こうした課題解決への、ひとつの試みであり、着実に成果を上げています。

本館のボランティアは書架整理、読み聞かせの2つの分野に、現在24名の方にご登録いただき、利用者にとって、使いやすい、親しみやすい図書館づくりに力をお借りしています。また、子どもたちの読書環境づくりにも参加していただいています。こうしたボランティアの方々の活動に、市民、利用者から「書架が見やすくなった」「親切に案内していただけた」「子どもがよろこんだ」などなど、たくさんの声が届いています。また、養護学校へ出前で読み聞かせを行いましたが、児童の方々からは「また来てください」とお礼のお手紙をいただき、うれしい思いをしました。図書館ボランティアの方々は図書館のよき“広報マン”でもあり、利用者と地域を近づけてくださっていると実感しています。

今後の課題として、ボランティアの方々の意欲を生かすうえでもスキルアップが欠かせないこと、ボランティア同士のネットワーク、相互交流がますます必要であること、職員との連携に共通の理解、コミュニケーションが一層欠かせないこと――などがあると思います。まだまだ試行錯誤、手探りの部分も多いのですが、これからの図書館づくりには、なくてはならないパートナーであると考えています。（談）